
スマブラメンバーを1つの町に凝縮中

ほーき雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマブラメンバーを1つの町に凝縮中

【Nコード】

N2698Z

【作者名】

ほーき雲

【あらすじ】

五武山市、僕の小説の大半はここが舞台である。だったらスマブラメンバーをここに住ませてみたらどうだろうか？いちいち五武山市に来る必要はない。最初からいるのだから。（笑）

そんなテンションで始まったが・・・。

プロローグ（前書き）

予告編の続きです。見てない方は活動報告のアーカイブをご覧ください。

ブローグ

ある日、ほーき雲は立ち上がった。

ほーき雲「スマブラメンバー全員探すって絶対1人じゃきつい。しかも五武山市っていう広い場所に散らばっちゃってるんだもん。」

実は全員ほーき雲の近所にいるのだが・・・。

ほーき雲「誰かに救援要請しよう。」

マスターハンド「あれ？ほーき雲からメール？」

クレイジーハンド「ほーき雲からメール？」

D「ほーき雲からメール来たよ。」

『【救援要請】五武山市内に散らばったスマブラメンバーを全員僕の家の近くに集合させてください。僕1人じゃ足りません。よろしくお願いします。』

ちなみに、Dって何だ！？って思った人は大規模な逃走中にて詳細を知ることができます。

マスターハンド達「探すか！」

全員ほーき雲に協力するようになった。

みんなほーき雲の家から離れたところに行った時、スマブラメンバーは・・・。

リンク「みんなどうする？」

リユカ「家でゲームやる！」

ルイージ「4人1組になって分かれよう！」

全員「賛成！」

こいつらが家にいる限り、ほーき雲達はスマブラメンバーを1人も見つけられないだろう。

続く

ミサカ搜索隊（前書き）

どうなると思いますか？

ミサカ搜索隊

ほーき雲はスマブラメンバーを探す途中、ある少女に出会った。

ほーき雲「ちょっと打ち止めちゃん。人探しに協力してくれない？
スマブラメンバーを探しているんだけどね。この五武山市のどこに
いるのかわからないんだ。そこで君を含めた9970人でスマブラ
メンバー達を探して欲しいんだ。」

打ち止め「それじゃ、シスターズ全妹達に指示してみる。ってミサカはミサカ
は了解してみたり。」

その瞬間、いきなり9969人の人が現れた。しかも全員全く同じ
服装、全く同じ体型である。

シスターズ
妹達。

それはある電撃使いのクローン体である。200000+1体が造ら
れたが、そのうち10031体はある『最強の超能力者』によって
殺されている。

ちなみに、+1体というのは制御個体で、ほーき雲が出会った少女
のことである。

ほーき雲「これだけいれば全員見つかるだろう。」

打ち止め「でも、ミサカは行かないよ。ってミサカはミサカは自分
の参加だけは断ってみたり。」

ほーき雲「十分だよ。9969人もいるのはありがたい。さらに僕もいれてマスター達もいれて9973人。これで見つからなかったらヤバイよね。」

そして夕方。

ほーき雲「かなり疲れた……。見つかった？」

検体番号12345「すみません！見つけたのですが逃げられました。とミサカは失敗報告をします。」

ほーき雲「どこで見つけたの？」

検体番号12345「ちょうどこの家の隣ですよ。とミサカは報告します。」

ほーき雲「……。え？」

検体番号12345「ですから、この家の隣でマリオと思われる赤いおっさんを見つけました。とミサカは再度言います。」

ほーき雲「……。まさかみんなもうここに住んでるの？」

検体番号12345「その可能性が一番高いです。とミサカは脳内の計算により当然の答えを出します。」

ほーき雲は隣の家をノックしてみた。

マリオ「あつ、ほーき雲だ。ゲームしたいの？」

ほーき雲「・・・君達ここに住んでたのね。他の人達は？」

マリオ「みんなこの近くの家に住んでるよ。」

ほーき雲の力は抜けてしまった。その後、どうやって夕御飯を食べて、眠りについたのか覚えていなかった。

続く

ミサカ搜索隊（後書き）

いきなりスマブラ以外のキャラクター出しやがって・・・。

市長が死んだ。
(前書き)

いきなり何があったんだ!?

市長が死んだ。

翌日

ほーき雲「ああ、よく寝た。」

リンク「こっちはお前の家に連れていくの大変だったんだぞ。いきなり気絶しやがって。」

ほーき雲「すぐ隣だろうが。」

ヨッシー「そうそう、こちら辺に空き家いくつあるの?」

ほーき雲「50を越えてるって聞いた。」

ピット「だから1人1件でいいんだ。」

ほーき雲「とにかくたくさんあるんだよね。」

新聞社の人「号外!号外!大変なことになったぞ!」

ほーき雲「大変なことってなんだ!?!」

ほーき雲は号外新聞を1つもらう。

ほーき雲「なんだってえー!?!?!?!」

市長が死んだ。(後書き)

立候補者は危ないやつらしい。

新市長大作戦（前書き）

誰なんだよ！？だいたいわかるかな？

新市長大作戦

ほーき雲「ほら、あれを見る。」

ほーき雲が見ているものは……。

タブー「これから私タブーが新市長となるのです！皆さんぜひ私に投票をお願い致します！」

ほーき雲「わかっただろ。大声でタブーが演説してるんだ。しかもあいつ以外に立候補者はいない。このままじゃタブーが新市長。となれば五武山市は終わるだろうな。」

リュカ「こんなのどうすりゃいいんだよ……。せつかく来たばかりなのに……。」

ほーき雲「方法なら1つある。他の誰かが立候補して選挙に勝つんだ！」

マスターハンド「しかし、それが難しいのは自分でもわかってるんだろ。今のタブーの支持率は最大。そこをどうやって勝つのか思い

付かないんだろ。普通そうだろ。誰が立候補するのかすら決めてないのにな。」

マスターの発言は最もである。しかし、それを否定するかのように発言をした者がいた。

D「もし、僕を含めた昔の仲間たちの中で、『リーダーシップ界の王』と呼ばれる男が立候補したらどうなると思う？」

ほーき雲「そういうやつがいたら苦労しないよ。」

D「そういうやつは実際にいる。しかも遊び、仕事に関わらず最高のリーダーシップを見せる男。そいつが何回仕切っても誰も文句を言わない。しかもそいつの夢は政治家だ。市長になるのも第一歩になるはずだぜ。そいつの夢のため、タブーからこの五武山市を守るため、そいつを立候補させてみないか？」

全員「おおーーーーー!!」

ほーき雲「おい、1つ言っておくぞ。勝てるかわからないのはわかっているが、もし勝ったとしたら、タブーは攻撃するかもしれない。その時のために、選挙当日は戦闘態勢に入っとけよ。」

アイク「そこんとは大丈夫だぜ。なあみんな。」

アイク以外「おおーーーーー!!」

D「よし!その勢いだ。それじゃ、やつのところへ行きますか。」

続く

新市長大作戦（後書き）

果たしてどんなやつなのか？タブーが市長になることを止められるのか？

Ⅰ（前書き）

この小説は文字数の目安を400～700文字にしてるから毎日更新できそう。

T

D「おい。」

???「なんだ、Dじゃないか。」

D「お前、五武山市の市長になれるとしたらなりたい？」

???「そりやなりたいたさ。地方自治でもいいからやってみたいもんだな。ところで、たくさん人を連れてきたな。どうしたんだ？」

ほーき雲「突然市長が死んで、新市長立候補者がタブーっていう悪いやつしかいないんです。」

???「そりやいけねえ。僕が新市長立候補してやる。ちなみに、僕の名前はTだ。」

ほーき雲「T？Dに続いてTですか？」

T「そうだけど？」

ほーき雲「おいD。これはどういうことだ？お前の仲間はアルファベット1文字のやつしかいないのか？」

D「うーん。それが大半を占める。でもそれ以外もいることにはいる。」

ほーき雲「突然だけど例え話しようか。例えば、僕がマルスに腹が立ったとして。」

マルス「なんで俺なんだよ。」

ほーき雲「僕がマルスをボコボコにしたとする。この小説を読んでいる人にはマルスが好きな人が若干いることにはいるんだよ。」

マルス「なんで若干しかないんだよ。」

ほーき雲「だけど君はオリキャラだから君のことが好きなやつは超不人気マルスよりも少ないってことになるんだな。」

D「それがどうしたのかな？」

ほーき雲「つまりマルスよりも強風に痛めつけてもいいってことになるんだよ。」

D「なんで何気なく武器持つてるのかな？」

ほーき雲「僕だって武器くらい持つんだよ。さあどうする？」

D「そもそもなんでこんな目にあっているのかわからな……」

ドカーン！

Dは奇跡的に生きていた。

ほーき雲「もつとまともな名前のやつを友達にするように。別に今の仲間を見放せとは言わないから。」

D「また今度紹介します。」

何はともあれ、新キャラのTと共にタブーの新市長阻止作戦が始まった。

続く

Ｔ（後書き）

Dはいい人なんですよ。今回ひどい目にあっただけで。

みんなで作り上げる作戦

ほーき雲たちは選挙に向けて頑張っていた。立候補するのはＴだけだが、ほーき雲やスマブラメンバー達には絶対にＴを新市長にしなければならぬ理由があった。彼を市長にできなければタブーが市長になるのだ。

ほーき雲「僕達も協力してるし、Ｔも演説がんばっているし、なんとか新市長になれるかな。」

D「僕だってちょっとケガしてるけど、Ｔの直接的な友達としてしっかりフォローしていかなくちゃ。」

ほーき雲「よくちょっとしたケガで済んだな。」

ほーき雲達は、Ｔが新市長になるために、タブーが新市長になるのを阻止するために、２つの思いを込めてポスターの貼り付けを始めとする手伝いをしている。

選挙前日

Ｔ「きつと大丈夫。みんな頑張ってくれたじゃないか。タブーがなんだ。あんなやつを市長にはしない。」

ピット「頼もしい。」

ほーき雲「なあ、みんな頑張ったもんな。タブーなんかに負けないよな。」

全員「おおー！ー！ー！ー！ー！」

ほーき雲「あとは結果を残すのみだ！」

続く

みんなで作り上げる作戦（後書き）

次回は選挙本番。Ｔか？それともタブーか？

選挙中、役所前

ほーき雲達は五武山市役所に来ていた。・・・と言っても来ているのはほーき雲、D、Tの3人だけ。スマブラメンバーまで全員で来られたらすごいことになるからだ。

ほーき雲「次々と人が市役所を出入りしている。みんなで投票して
るんだね。」

D「あれ？タブーも来たぞ。」

タブー「おや？もしかして突然現れた2人目の立候補者とは君のこ
とかなほーき雲君。」

ほーき雲「僕じゃない。こいつだ。」

ほーき雲はTの腕をつかんで言った。

タブー「知らないやつだな。」

ほーき雲「お前、ポスターはちゃんと見る。市のあちこちにTって
書いてあるだろ。どこにほーき雲の名前があつた？言ってみな！」

タブー「こんなことで強気になりやがって。俺がそいつを知って無
かるうが、選挙で勝てばいいのだ。」

T「お前みたいなのには負ける気がしないな。協力ということを
知らなそうだ。」

タブー「何を言おうと俺の演説は大人気さ。このままだと俺勝つよ。勝って恥かかせちゃうよ。」

ほーき雲「やってみな！」

役人「これより投票を終了します。得票計算までしばらくお待ちください。」

ほーき雲「さあ、投票が終わった。あとは結果だけだぜ。」

続く

選挙中、役所前（後書き）

これ一応コメディーだね？本気でいがみあっちゃったりバトルしたり・・・。

5倍

役人「選挙結果が出ました！T氏がタブー氏の約5倍という差で勝ちました！」

全員「やったあああああああああ————！！！！！！」

タブー「許せない・・・許せないぞ！！」

タブーが暴れたした。

ほーき雲「予想通り、とことん裏切らないね。スマブラメンバー達。今が腕のみせどころだぜ！！」

スマブラメンバー一斉にタブーに突撃。

しかし、それで降参するタブーではない。必死で抵抗してくる。

フォックス「スマートボム！」

ルイージ「ファイアジャンプパンチ！」

あちこちから攻撃が飛んでくる。やはり人数では勝てないのだろうか。

ネス「スマッシュボール！」

リユカ「スマッシュボール！」

ほーき雲「さあやっちまえ!!」

ネス・リユカ「PKスターストーム!!」

無数に降る青と黄色の隕石。それをタブーは何回も当たっていく。

タブー「絶対仕返ししてやる!!絶対だぞ!!」

タブーは一応去ってった。

全員「タブーを倒したぜ!!」

そしてタブーは

タブー「スマブラメンバーおのれ・・・。」

タブーの近くに白っぽい男が現れた。

タブー「あいつ殺せば少しはスーツとするかな・・・?」

タブーは白っぽい男に襲いかかる。

その瞬間の出来事だった。タブーが男に触れた瞬間、はねかえすような力が自分にかかっているのがわかった。

一方通行「なんだお前?」

タブー「お前こそ何者だ！」

一方通行「何者だだと？ならば問題です。学園都市最強のレベル5
といえは誰でしょうか？」

続く

5 倍（後書き）

一方通行、読み方は『アクセラレータ』です。

一方通行（アクセラレータ）（前書き）

敗北したタブーのもとに現れた一方通行^{アクセラレータ}。どうなるでしょう？

一方通行（アクセラレータ）

アクセラレータ
一方通行「俺をナメンなよ三下ア！」

タブー「お前が何者かは知らないが、俺がここで退く訳ねえだろ！」

一方通行「ならばここで問題です。この俺、アクセラレータ一方通行は一体何をしているでしょうか？」

タブー「知るか！」

タブーは構わず一方通行に攻撃する。何発も何発も。撃ちまくるが、一方通行は全ての攻撃を自分に触れた瞬間にはねかえしている。

タブー「お前、反射してるのか？」

一方通行「残念。ちょっとおしいけど、俺のしていることとは違う。」

否定された。

一方通行「答えはベクトル変化。運動量、熱量、電気量。あらゆるベクトルに触れただけで変化できる。」

タブー「つまり、攻撃は当たらないって訳か。……ビーム系ならね！」

タブーは今度は一方通行に体当たりをしてきた。

一方通行「こりねエやつだなア。しょうがねエ。30倍で反射してやるよ！あばよ三下ア！！」

タブーが一方通行に触れた瞬間、タブーはすごい勢いで吹っ飛んだ。こうして、タブーを巡った五武山市の危機は無事ハッピーエンドを迎えたのだった。

その頃、ほーき雲の家は

ほーき雲「おっと、タブーが吹っ飛んでる。2度と来るなよ。さあ、明日から楽しい日常生活を送るぞ！絶対に空き家村とは言われないような愉快な場所にしてやるぞ！」

続く

一方通行（アクセラレータ）（後書き）

次回は新しい章に入ります。

大騒ぎしても近所迷惑にならない

タブーがいなくなり、平和な五武山市。しかし、空き家村では大騒ぎが起こっていた。

ほーき雲「いいか？ここは空き家村だ。そこに僕達は住んでいる。つまり、この周辺には僕達しかいないことになる。それはどういうことか。答えは大騒ぎしても近所迷惑になりにくいってことなんだぜ！さあ、叫べ騒げの大盛り上がり大会を始めようぜ！！」

全員「おおーーーーー！！！！」

ほーき雲「まずは大食いゲーム！！ルールは簡単。カービィがヨッシー。どちらがより多く食べるかを賭ける！！ちなみに僕はカービィに賭けるよ！」

ゼルダ「私はヨッシーに賭ける。」

ネス「僕はカービィに賭ける。」

カービィ「絶対負けない。大食いは僕の大事な特徴。それで負けたらカービィの名前が傷つく。」

ヨッシー「よく言うじゃん。こっちだって伊達に長い舌出して食いまくってる訳じゃないんだよ！」

ほーき雲「よい・・・スタート！」

カービィ・ヨッシー「いくぞ！！」

続
く

限界が知りたい。

ほーき雲「カービィに賭けた人も、ヨッシーに賭けた人も、みんな
で食べ物を戦場に運びましょう。やはり用意した食べ物を全部押し
込めるのは無理でした。」

全員「正直面倒だけどまあいいよ。」

こうして、みんなで大量の食べ物を運んで行く。たぶんみんな同じ
ことを考えているだろう。

『食い過ぎだよ！普段の食事では全然満たされてないわけ！？』

そして、『戦場』に着いたほーき雲達は見た。

食べ物が無くなっている。しかも、両者共に次の食べ物を少しイラ
イラしながら待っている。

ほーき雲「まだ余裕そうですね。」

カービィ「当たり前だよ！」

ヨッシー「早くみんなが持ってきた食べ物ちょうだい！」

ほーき雲「はい。」

テーブルに置いた瞬間、両者共に恐ろしいスピードで食らいついて
いく。

ルイージ「ほーき雲、もうこれで最後だよ。」

ルイージの発言を一切無視し、最後の食べ物も全て食べてしまった。

ほーき雲「これ以上食べ物を用意してないので、『2人で僕に勝った』ということにします。」

こいつらの食事は計り知れない。

続く

限界が知りたい。（後書き）

タイトル通り、こいつらの食事量の限界が知りたい。

なお、これからこの小説のみ感想返信担当を作ります。（スマブラメンバーじゃないけど・・・）

奇数日 アクセラレータ 一方通行 偶数日 打ち止め（ラストオーダー）

が基本ですが、時々臨時で代役が担当することもあります。その時は後書き欄にちゃんと書きます。ちなみに今日は15日なので今日中に書いた感想は一方通行が返信します。

新登場

ほーき雲「突然ですが、新メンバーの登場です。ただし、知らない人が多いと思うので、簡単に紹介します。」

新メンバーを連れてきたほーき雲。

ほーき雲「また、これより『空き家村グループ』という名前が誕生します。」

リユカ「早く新メンバー呼んでください。」

ほーき雲「新メンバーはこちら、塊魂の王子とイトコハトコとルーキーの皆さんです。」

王子「よろしく。」

エース「面白そうだね。」

変わったキャラクター達がたくさん現れ、スマブラメンバーも注目している。そして中でも注目を浴びていたのがディップである。

ポポ「すごい！あちこちカラフルに光ってるよ！」

ディップ「どうもディップです。よろしく。」

???「ところで皆さんは僕が存在に気づいていますか？」

マスターハンド「わっ！！すぐ隣に透明人間！！」

ジャングル「ジャングルです。僕は透明なのでそこにとよろしく
お願いします。」

ほーき雲「こうしていいメンバー集まったでしょ。他にも特徴的な
キャラクターがたくさんいるからちゃんと交流してみることをおす
めするよ。最後に空き家村グループの意味を説明します。」

突然結成された空き家村グループ。どういう意味があるのか？それ
は次回です。

続く

新登場（後書き）

今日は感想返信はラストオーダーがします。

打ち止め「わーいわーい。ってミサカはミサカは空き家村グループ
に入りたいと思いいながら喜んでみたり!!」

空き家村

空き家村。

原因は不明だが、五武山市のとある場所にたくさんの家が建てられた。しかし、これらに住む人は1人しかいなかった。その1人がほーき雲である。

ほーき雲が住んでる1件を除いて誰も住んでいなかったため、空き家村と呼ばれている。

そこへ今回、スマブラメンバーをこの空き家村の大量の空き家に住ませることにした。

空き家は確かに減った。しかし、まだたくさん残ってるのが現状。つい先日までほーき雲も50件くらいしかないと思っていたが、実際は数えきれないほどある。

ほーき雲はこの空き家村という名前を消すことが目的で、スマブラメンバーに加え、塊魂のイトコハトコ達も住ませたが、まだまだ空き家は残るのが現状。しかし、今までとは違い、住んでるのは1人ではない。住民は少しずつ増やせば良いだろう。と楽観的に考えられるようになった。空き家村グループとは、空き家村という名前を消すためのグループである。（空き家村という名前が消えた時、グループ名も変える予定らしい。）

ほーき雲「それじゃ、新住民探して来るよ。」

ジュン「いつてらっしゃいほーき雲。」

バンバン「絶対空き家村なんて名前消してやるっね！」

空き家村と呼ばれるエリアを抜けた瞬間、ほーき雲はつぶやいた。

ほーき雲「空き家村という名前もそうだけど、このホールの名前も変えてやりたいよな。」

そこには、ほーき雲がスマブラメンバー達を集合させるために使っているホールがあった。

そして、そこには『境界ホール』と書かれていた。

続く

空き家村（後書き）

次回は、ほーき雲が外出中の時のスマブラメンバー達の生活を送ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2698z/>

スマブラメンバーを1つの町に凝縮中

2011年12月17日20時48分発行